

## 旧態依然とした檀家制度からの脱却を図り、 自立した寺として「仏教本来の魅力」で人を呼び込む

埼玉県熊谷市の見性院は、宗教・宗派、国籍を問わず誰にでも平等に門戸をひらく「みんなの寺」を標榜している。寺院と僧侶を取り巻く環境を「古いヒエラルキーにとらわれた世界」とぼつさり斬り捨て、宗教が持つ力、仏教本来の魅力を取り戻したいと語る橋本英樹住職は、修行も研鑽も積まずに実家の寺で安穩とした日々を送る僧侶の多さを憂慮し、「自立した寺」だけが生き残るとして2012年に檀家制度を廃止した。近隣の寺院からは批判も多かったが、旧来の檀家は一切離脱せず、すべて新たに設けた「信徒」へと移行したという。タブーを恐れず、改革の矢面に立ち続ける橋本住職に話を聞いた。



橋本英樹住職

### 寺と人を結ぶのは「信仰」である

2012年に檀家制度を廃止した理由を、橋本住職は「ピラミッド型の組織の中で檀家制度という温床に甘んじていては、いずれ寺院経営は成り立たなくなると考えてのこと」と話す。「お墓はいらない」「葬式はしない、または小規模で良い」という人が増え、宗教離れが進む中で、あえて守りではなく攻めに転じたと言っても過言ではないだろう。

「寺院と住職と言えば、かつては地域の尊敬と信頼を一身に集める存在でした。しかし、今はどうでしょう。法事と葬儀をこなし、お布施を自らの収入のように扱って、修業とは無縁の生活を送っている僧侶が驚くほど多いのです。この悪しき状態を脱し、宗教と寺院の持つ力を取り戻すためには、諸悪の根源とも言い得る檀家制度を廃止するしかない。それが私の結論でした」(橋本住職)

檀家制度廃止と同時に、同院は年会費や寄付金をも廃止した。当初は、「それで寺院を維持していいのか」という声があり、近隣の同門寺院からはかなりの反発があったという。

「檀家制度を廃止すると決めたとき、旧来の檀家さんとの関係も1度白紙に戻しました。離檀料も取らず、私の意図を理解して、信頼してくれる人だけ残ってほしいとお伝えしたんです。みなさんの自由意思にお任せした結果、離脱した檀家さんはなく、すべて信徒へと移行してくれました」

寺院と人は、檀家制度という古くからの慣習によって結び付くのではなく、仏教の信仰や住職自身の力量によって結び付くべきだ。橋本住職が寺院の復活を期して踏み出した道は、批判以上に多くの賛同の声に支えられて切り拓かれていくことになる。



熊谷市内のみならず近隣の市や群馬県から訪れる人も多い



誰にでも平等に門戸を開く「みんなの寺」



永代供養塔は月3万円から納骨が可能



境内には明確なお布施一覧が貼りだされている



## 収入の伸び悩みに直面するも、墓地と永代供養塔の需要増によって回復

年会費と寄付の廃止に加え、お布施の額を戒名ごとに明示して以前より減額した結果、見性院の収入は伸び悩む。しかし、ここで思わぬ追い風が吹いた。檀家制度廃止がメディアで大きく取り上げられたことで永代供養塔の申し込みが相次いだのである。

「永代供養塔に関しては、お預かりしていた遺骨、いわば担保があったことが非常に大きかったですね。管理費は一切不要、誰でも平等に一律3万円で納骨可としましたが、メディアによる後押しもあって塔を建立するために要した金額は1年足らずで回収できました。3万円という金額は、多少生活が苦しい方でもなんとか出せる金額をと考えて設定したものです」

永代供養塔では、全国どこからでも生前申し込みを受け付けており、郵送でも遺骨を受け取っている。俗名のままの納骨も可能だ。「金銭的な問題で墓地が建立できない」「維持や管理にお金をかけられない」「後継者がいない」といった悩みを抱える多くの人に支持されており、橋本住職の当初の予想に反して手厚い供養を望む人もいる。

「永代供養では、施主との関係が長く続くとは思っていませんでした。しかし実際には、年忌法要や施餓鬼を依頼する方がかなりいて、信徒になりたいと希望される方もいたのです」

永代供養塔の近くには、この世に生を受ける前に



境内の掲示はどれも「開かれた寺」であることを感じさせる



本堂左手の釣鐘堂



墓地の左手にある万吉稲荷

天に召された子どもたちを供養する水子供養の地藏菩薩、1万円から納骨できる動物愛護供養塔も建立されている。見性院の墓地はまさに「みんなのお寺」を体現するようなつくりだ。

## 好調な売れ行きを見せる墓地は熊谷市初の公認霊園として拡張が決定

永代供養の順調な推移を受け、見性院では葬儀から墓地分譲まで供養に関する一連の業務を寺院事業として行うことを決める。葬儀収入、墓地の分譲・販売による収入を得ることで、さらなる安定的な収入源を作ろうと考えたのである。

「墓石は指定石材店からの購入に限っている寺院墓地が多くありますが、見性院ではそうした決まりを設けていません。さらに、寺院で直接仕入れをしている墓石に関しては、一般的な石材店で購入するより3割ほど安く建立できます」

こうした工夫が功を奏して、熊谷市のみならず行田市や蓮田市など埼玉県内の近隣の市、ときには群馬県太田市からも見学者が訪れ、墓地は好調な売れ行きを見せる。境内にある「見性院墓地」の販売区画は次々と埋まり、少し離れた「第二霊園」の開発を経て、「見性院墓地」の拡張が決まった。「熊谷霊園」として販売される拡張区画は、熊谷市初の公認許可を受けた正式な霊園である。寺院墓地も霊園化するためには正式な経営許可が求められることから、設計から書類申請、許認可まですべてを見性院独自で行って、曹洞宗宗派本部、埼玉県学事課・熊谷市環境推進課の了承を取り付けた。

「事業者やブローカーは一切仲介させず、すべて当院の手で完成させた霊園です。結果として、『熊谷霊園』でも良いものを廉価で提供できるようになりました」

当然のことながら「熊谷霊園」でも従来の見性院墓地の方針を受け継ぎ、寄付・年会費・管理費は一切不要。宗教・宗派・国籍を問わず分譲する上、葬儀や法事については寺院内の本堂で行う。喪主の意向を取り入れた自由な形で、なおかつ寺院ならではの荘厳な法要が可能とあって、順調な販売が見込めるだろう。



参道から本堂をのぞむ



本堂へ向かう通路には仏具や仏壇が並んでいる



六道のそれぞれにおいて衆生の苦しみを救う地藏菩薩

## 改革の次なる一手、信徒制度「随縁会」の発足

「檀家制度は封建社会の遺物。宗教はもっと自由な世界のもので。現在は、壊れゆく檀家制度から次なるものが生まれるまでの過渡期。寺院も、解放された旧檀家の方々も、日本仏教界の再生と発展に寄与していくときなのです」

橋本住職はそう話し、今後は見性院の墓地の使用権者である「信徒」の和の構築とその拡大にも力を注ぐとした。その方策の一つが、信徒会「随縁会」の発足である。

「随縁とは、『縁を結び、仏に帰依し、縁に報いる』ということ。仏教に帰依した証として縁を大切に、縁ある人に対して自分を生かすとともに慈しみや施



今後は「伝統を守るための改革」に力を注ぐ

しを心がけるという教えが込められた言葉です。『随縁会』として、日本仏教界に新たな信徒思想を投げかけていくことで、再生と発展を促したいと考えています」

「随縁会」の会員は個人を中心として、見性院の方針・施策に賛同して同院を護持し発展に深く寄与する「特別会員」、見性院の方針・施策に賛同しながら特に葬儀や法事などの宗教儀礼を中心に関与する「普通会員」、見性院管理墓地を使用しているが見性院との宗教的關係は自由とする「自由会員」に分かれる。自由会員は、見性院の方針・施策に賛同することでいつでも普通会員・特別会員への変更が

可能だ。もちろん、葬儀・法事についてはどの会員も平等である。

「この会員制を見て、『やっぱり変わったお寺だ』と思う人が多いでしょう。しかし、何事においても、最初に常識を打ち破る人はタブーを侵さなければならないし、どんなに白い目で見られようとも進んでいかなければなりません。伝統を守るためには改革が必要。今は、『みんなのお寺』として間口を広げ、信徒を増やすことで社会に覚醒を促していくことが大切だと思っています。収益を追い求めるのではなく、ひとりの社会事業家として、理想の実現に向けて信念を曲げずに行動していきたいと思っています」